

漢方クリニック訪問

最先端医療と東洋医学を併用し、脳神経外科的にみた全人的医療をめざす。



宮田 親平氏
医学ジャーナリスト

(みやた・しんぺい) 1931年東京生まれ。東京大学医学部薬学科卒業後、文藝春秋に入社。「週刊文春」編集長、編集委員などを歴任。医学ジャーナリスト協会名誉会長。著書に「毒ガスと科学者」「エイズはとめられる?」「病院えらび事典」「異端のガン特効薬」「だれが風を見たでしょう」「ハゲ、インポテンス、アルツハイマーの薬」「ヨーロッパ市電王国に行く」など多数。

都内に新しいコンセプトの脳神経外科クリニックが誕生した。その医療理念は、「爽やかな癒しの場」であることと、医療の「氷先案内人」であること。そして最新鋭のヘリカルCTを備えて元気な時から健康管理に当り、ときには専門医に紹介、さらに訪問診療も行うなど、いつでも患者のかたわらに待る「主侍医」でありたい。東洋医学も用いて、健康な脳が奏でる心と体のハーモニーがいつまでもつづくことを願ってのオープンという。

「五感に訴える」治療を

JR大森駅から約一〇分。広い道路に面し、踊るようなロゴの文字から風変わりな『くどうちあき脳神経外科クリニック』は、正面いっぱいガラス張りなので、外から待合室が隈なく見通せる。明るい診療所である。

工藤 千秋氏



(くどう・ちあき) 1958年、長野県生まれ。英国パーミンガム大学、労働福祉事業団東京労災病院、鹿児島市立病院脳疾患救急センター等で脳神経外科を学び、1989年から東京労災病院に勤務。同副部長を経て、2001年11月より大田区大森に「くどうちあき脳神経外科クリニック」を開設。

昨年十一月に開院したのだからまだピカピカ。内部はグリーンやブルーやオレンジなど、どれも淡い色に統一されていて、入り口から段差がないことも、いっそう「開かれた診療所」の雰囲気強める。

院内に入ると、アロマが立ち込めていて、「点滴や薬だけで治すのではなく、人間の五感に訴えて治す」というポリシーでこのデザインをしたと、工藤千秋院長は言う。

一九五八年長野県生まれ。日本のベ・ケーシーたらんと脳神経外科医を志す。英国のパーミンガム大学に留学。パーキンソン病の神経移植による治療

という、先端的研究に従事する。以後十年間、東京労災病院で脳神経外科医として勤務し、副部長を務めたが、とくにこの科にかかる患者さんたちにとって、日本の医療体制が不備であることを痛感した。

それは、医学が専門化、高度化するほど、病院が制度上の制約や多忙もあって「パーツの修理工場」のようになり、退院後どこへも行きたいところのない人々が増えているし、医師も人間の体全体を診ることができない。そのためまず、すべての患者に対するトータルな「爽やかな癒しの場」が欲しい。

次に、病気に関する悩みと疑問を患者にわかりやすい言葉で説明し、複雑な医療の世界に導く「氷先案内人」で



アロママッサージで患者をリラックスさせながら点滴



宇宙空間のイメージを演出した、最新鋭のヘリカルCT室

ありたい。それには元気なときから健康管理をし、病気になるばいっつでも診療し、必要とあれば専門医に紹介する。そして治療のあとも、継続的にケアする。病院には「主治医」がいるが、病気を治すだけでなく、いつでも患者のかたわらに「はべる（侍る）」という意味で、そのような「主侍医」でありたい。

ヘリカルCTを導入

このような医療理念のもとに開いたのがこのクリニックで、「癒しの場」としては、点滴室では深海のイメージのオブジェを備えたり、アロマセラピーを行ったりする。快いBGMが絶えず聞こえるほか、待合室ではハーブティーが供されるなどクリニック全体が「五感に訴える」仕掛けになっている。

一方、健康管理と病気の早期発見のために、最近普及しているMRIよりも、まだ全国でも数少ないヘリカルCTが、きわめて短時間に高品質で広範な撮影ができる長所があることに着目して導入した。そして、勤務していた東京労災病院などと提携して、病気が発見されたら、速やかに紹介し、退院後はケアに当たるといシステムで、医療全体に対する要の位置づけだ。

こうして、くも膜下出血、脳梗塞、脳腫瘍などの脳疾患の診断・治療にあたるほかに、このクリニックでは、いくつかの特色がある。

第一に、痛み外来を設けて、頭痛、頸部痛、腰痛などの痛みを、ペイン・クリニック的な技術で治療する。痛みを訴える患者には心因からくる痛みを持つ人も多いので、心の面からも治療

する。

第二に、パーキンソン病はもつとも造詣の深い病気であるので、薬だけでなく、色々な角度からの治療ができる。

痴呆症に漢方薬を併用

第三が、患者だけでなく、周囲の人にもつらいアルツハイマー病などの老人性痴呆に対処する痴呆外来だ。ここでは、漢方医学を用いるのがユニークで、英国留学時代、同僚で台湾から来ていた医師が、治療にイチョウ葉エキスをを用いていたのに興味を抱いたのが始まりだった。

平成元年頃から東洋医学に没入し、いろいろな漢方薬を試みた結果、効果があることがわかった。西洋薬との併用で治療に当たっており、これはアメリカでも注目されて、現在臨床試験が行われているという。

第四が脳ドックで、頭と体の健康診断は定期に行うことが大切だ。ことに脳腫瘍や将来痴呆症につながる可能性のある「症状のない脳梗塞」を早期発見したい。とりわけ健康診断などを受ける機会が少ない主婦に勧めたい。

第五として、市民講座を開き、そのときどきのトピックスを一緒に勉強する。

第六に、お年寄りや来院が困難な人々を定期的に訪問して、在宅の診



バリアフリーで明るく、「開かれた診療所」と評判（待合室付近）

療・看護・介護を行う。ここでも脳梗塞後遺症などの患者に補剤といわれる補中益気湯が用いられ、体力が付き、気持ちも明るくなり積極的になるなど高齢社会の中での在宅医療の場でも漢方治療は効果を発揮している。

そして最後に、すでに欧米で行われている脳・脊髄の機能を元気にするための最先端の機能的脳外科的治療を、大学病院などと協力してチャレンジしていく。

スタッフ以外は一人で、最先端医療から漢方治療まで。そして患者の心を含めた全人的医療を展開するというかまへの志は大きい。四十三歳の働き盛りだ。

「自分の名をつけた診療所ですので、できる限り自分でやりたい」と、抱負を語っている。